アジアの風

第９号
2005年２月20日発行

題字：宋　貴美子

編集・発行　アジア児童文学日本センター（[redacted]）

“子どもの本の未来形をさぐる”アジアのつどい

第７回アジア児童文学大会　盛況裡に終了

“アジアの子どもの本　その未来形をさぐる――共生の時代に生きる子どもたちに”をテーマに、第７回アジア児童文学大会が２００４年８月４日から９日まで名古屋市および富山県大島町で開催され、盛況裡に終了しました。海外からは韓国、中国、モンゴル、台湾、マレーシアの５か国・地域から１１５名、国内からは８７名が参加、参加者総数２００名を越える大会となりました。暑い時期に、しかも名古屋から富山まで長時間のバス移動を伴うプログラムでしたが、幸い病気も事故もなく予定通り終了することができたのは、参加者の積極的な取り組みと、準備段階からの関係機関・関係者のご支援のお蔭です。

この大会の主催７団体の代表から成る第「７回アジア児童文学大会実行委員会」は、去る１２月２４日最終会議を開き、大会の総括ならびに決算を行いました。総括の結果、次のようなことが確認されました。①今回の発表論文は、これまでの大会に比べてレベルが高かったと言える。今後、作家や編集者による実践報告的な発表にも間口を広げていくべきではないか。②一般公開プログラムを充実させてアジアの児童文学に対する理解の環を広げようとしたが、公開プログラムの参加者がきわめて少なく、所期の目的を達成することができなかった。③大会規模の拡大に伴う経費の増大は、事務局のかかえた最も大きな課題であった。今後この大会を継続していくためにも、開催期間や内容等を再検討して予算の増大をくいとめる必要がある。

なお大会運営に係る総額１３，３６０千円の収支決算は、監事による監査を経て実行委員会で承認されました。その結果、実行委員会は目的を達成したため、規約第１３条の規定により解散しました。

第７回アジア児童文学大会ＲＥＰＯＲＴ

８月４日（水）

◇　海外参加者の出迎え、受付

海外参加者の出迎えや受付は午前中から始まりました。出迎えは名古屋空港とＪＲ名古屋駅。四方定子さん（故しかた・しん氏夫人）の指揮で、タクシー延べ２４台を使っての出迎えは無事終了。京都から貸切バスで直接ホテルへ到着したのは韓国参加者ご一行様でした。

受付は宿泊先の名古屋栄東急インのロビイで。元銀行員のボランティアも含め、事務局員全員で対応。参加費の徴収がたいへんでした。午後には東京や九州からの国内参加者も続々と到着。

◇　会長・副会長会議

１８時から東急インの２階で共同会長・副会長会議が開かれました。各国・地域の新しい会長や副会長の承認の件、次期開催国の件、故しかた・しん氏への感謝状贈呈の件、優秀論文への奨励金交付（大阪国際児童文学館から）の件等が審議され、いずれも原案通り承認されました。なお次期大会（２００６年）は韓国で開催されることに決定しました。

◇　前夜祭

１９時から東急インの２階広間で前夜祭（交流夕食会）が開かれました。まず故しかた・しん氏の霊に全員で黙祷を捧げ、氏への感謝状が定子夫人に贈られました。つづいて新しい共同会長・副会長の認証式が行われたあと、夕食会に入りました。国内からも４０名を越える出席で、和やかな交歓のひとときを過ごしました。

８月５日（木）

◇　開会式

大会会場の名古屋市青少年文化センター・アートピアホールでは９時から受付を開始、１０時から開会式が行われました。まず大会実行委員会委員長畑中圭一（アジア児童文学日本センター会長）の挨拶。この大会が「共生」をメインテーマにしていることを強調し、各民族の文化を互いに認め合いながら共存していくこと、さらに人間は自然の一員だという自覚に立ってすべての生き物と共生しながら地球環境を守っていくことを確認しながら子どもの本のこれからのあり方をみんなで考えましょうとアピールしました。

つづいて地元名古屋市長の挨拶（市民経済局長杉浦雅樹氏の代読）、共同会長を代表して韓国の李在徹氏の祝辞がありました。李在徹氏はこの大会の創設者として、「戦争と侵略で汚辱されたアジアの、不幸だった過去の歴史を正常化させるために児童文学を通じて相互理解を深め、共同関心事の討論を通じて児童文学の発展を図る」という創立趣旨があったことを述べられ、その趣旨は少しずつ達成されてきており、わたしたちはそれに矜持を持つべきだと主張されました。

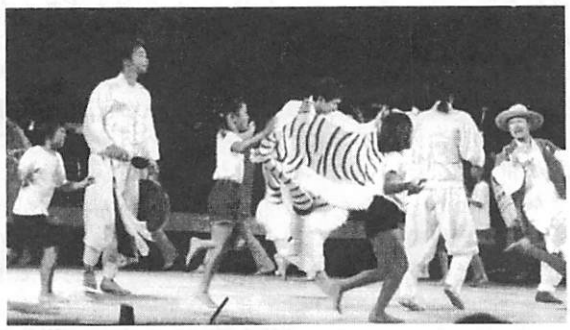
最後に各国・地域の代表を紹介して、開会式は終了しました。なおこの日は午後の講演会終了まで、すべてのプログラム内容は４言語（中国語・ハングル・英語・日本語）の同時通訳で進められました。

◇　親と子のミュージカル「アジアの風」

一般から公募した子どもたちと大人が４月から４か月間、毎週１回のワークショップを積み重ねて、しかた・しん作のミュージカル「アジアの風」をつくりあげ、上演しました。

「いにしえ　風は言葉をもっていた／……風は心をはこんでた／……聞いてみよう　アジアをつなぐ風の言葉を」という歌でドラマははじまります。

大凧に乗り、風に助けられて新しい土地をみつけ、帆掛船で移住したカタコランの人たちの話。虎とトッカビに襲われそうになった爺さんが風にそそのかされて歌い踊ると、それに惹かれたトッカビが爺さんのコブをとってくれたという話。海の向こうから風にのってやってきたスクナヒコナに助けられ、稲を育てて国をつくった大国主の話。いずれも風が心をつなぎ、幸せをもたらす話が歌と踊りで表現されました。



◇ 講演会「アジアにおけるファンタジー」

日本と中国の代表的ファンタジー作家、上橋菜穂子氏と彭懿氏による講演会が１３時から行われました。

彭懿氏の講演要旨

１９９７年以前、中国の児童文学界には「ファンタジー」という概念はなく、「童話」の天国だった。しかし、１９９７年からは数多くのファンタジー作品が出版されるようになり、中国の伝統的な児童文学である「童話」は未曾有の挑戦を受けることとなった。ファンタジーが世の注目を集め、何十種類ものオリジナルファンタジーが出版され、このことは「中国児童文学の世紀の日の出」であると言われた。

けれども２０００年になって思いがけない変化が訪れた。世界的ベストセラー「ハリー・ポッター」の中国語訳が出版されたのである。この本が出版されたことにより、中国児童文学界から向けられていたファンタジー批判の声は鳴り止んだが、一方で作家たちはその方向性を見失うこととなり、オリジナリティを喪失して「ハリー・ポッター」と類似の作品が大量に出現することとなった。しかしながら、オリジナリティを保持した作品を書き続けている作家もおり、われわれはそこに中国のファンタジーの未来をみているのである。

上橋菜穂子氏の講演要旨

アジアの児童文学と聞いて、日本人は何を思い浮かべるだろうか。欧米の児童文学であれば、多くの人々が即座に何タイトルも挙げることができるだろうが、アジアの児童文学作品のタイトルをさっと思いつける人はどのくらいいるのだろうか。グローバリズムの時代と盛んに言われるが、過去においても、現代においても、表現の主体を担ってきたのは圧倒的に欧米であり、アジアは彼らによって「他者」として描かれ、わたしたちはその「描かれた姿」を己の姿として読んできたのである。

ファンタジーは人の心も、世界観も丸ごと映しだす力を持っている。遠い国に暮らす人々がどんな風に世界を観ているのかが、空想世界に生き生きと見えてくる。ファンタジーの命は常識に囚われない想像力である。現実世界を解体し、飛び越えていくファンタジーの想像力は、自国の狭い常識に囚われて異文化を「変なもの」「馬鹿げたもの」と否定する心とは正反対の意識から生まれるものだと私は考えている。ファンタジーは、日常世界にぬくぬくと安住していることに飽き足らず、空想の翼を羽ばたかせてみたいと夢見ている人の文学であり、そこにはリアリズム文学とは異なる、他者理解を促す大きな力があるように思う。それを認識することが現代の世界においてはきわめて重要である。長い文字文化の伝統をもつアジアの人々が、その豊かな文学の成果を積極的に世界に発信していくことができれば、欧米の世界観だけで固まってしまっている現代の世界を解きほぐし、本当の意味での多民族共生をうみだす大きな力になると考えている。

◇ 論文発表

１６時から１７時３０分まで論文発表の第Ｉ部が行われました。（内容は次頁を参照）

◇ 歓迎レセプション

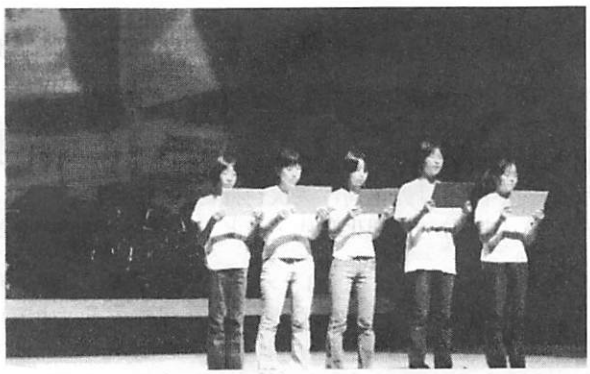
１８時３０分から２０時３０分まで、名古屋栄東急インの２階広間で歓迎レセプションが開かれました。なごやかなムードの中で、さまざまな交流・交歓が行われました。

ミュージカルの中で朗読された詩は林武憲（台湾）の「わんぱくな風」、尹石重（韓国）の「五色の風船を飛ばそう」、畑中圭一（日本）の「風よ」、韋婭（中国）の「風は男の子それとも女の子」の４編でした。このミュージカルに出演した親子は次の方々です。当日の皆さんの熱演に、大会参加者は感動しておりました。ご苦労さまでした。

☆　　☆

安藤花乃音、市川みこと、岩田成里菜、岩田帆之香、小川みのり、小川宣子、奥田貴穂、小森加奈子、小森かおる、柴田えり奈、柴田まり菜、清水未来、寺岡香名子、冨重麻里子、長谷川莉帆、長谷部晶子、長谷部那江、服部美由紀、服部かづ、盤所真奈、藤井早紀、前小屋望実、村瀬みずき、森田なぎさ、渡辺一成、渡辺健太郎、渡辺晴美

なお賛助出演の劇団名芸、フォークグループ鬼剣舞の皆さんもご苦労さまでした。



第７回アジア児童文学大会ＲＥＰＯＲＴ：ＰＡＲＴⅡ

８月５日（木）～６日（金）　論文発表

８月５日の午後から６日の夕方まで、論文発表が行われました。第Ｉ部から第Ｖ部まで計２５篇の論文が発表されましたが、発表者と論文テーマは次の通りです。

Ｉ．　（８月５日　16：00～17：00）　司会者：蒋　風、きどのりこ

1．戴淑芳（中国香港）「幻想文学の可能性と課題について――児童共生時代における空想力の必要性」
2．愛　薇（マレーシア）「ハリー・ポッター、孫悟空との遭遇――あわせてアジアファンタジー小説の潜在的素質と問題について」
3．パク・サンジェ（韓国）「韓国幻想童話の回顧とその課題」
4．馬　力（中国）「古典の再解釈：アジアのファンタジー発展の一可能性――孫晴峰による『シンデレラ（灰かぶり）』の再話から思うこと」
5．謝鴻文（台湾）「疎遠になる名作――台湾児童文学読書界における怪現象」

Ⅱ．　（８月６日　９：20～10：45）　司会者：趙天儀、中尾明

6．成實朋子（日本）「“神”の筆か“魔法”の筆か――日中両国における児童文学の翻訳について」
7．チョン・ソンエ（韓国）「共生社会を志向する韓国の生態童話」
8．游珮芸（台湾）「児童文学の中の大宇宙――意識のスタイルと価値観の変革」
9．黄育紅「宮澤賢治の共生社会――その童話の現代的意義をめぐって」
10．金　晃（日本）「絵本で生きものとの共生を訴える」

Ⅲ．　（８月６日　11：00～12：25）　司会者：林煥彰、井上寿彦

11．キム・ジャヨン（韓国）「韓国人情緒がこめられた絵本の研究」
12．ジョン・ミョンヒ（韓国）「韓国の伝統美を具現化した絵本について」
13．シン・ヒョンジェ（韓国）「民族説話を背景とした絵本について」
14．ダシドンドク（モンゴル）「真夏のアイスクリームよりも絵本を」
15．山本美千枝（日本）「昔話絵本を使った読み聞かせの国際比較――日本・韓国・中国の授業実践を通して」

Ⅳ．　（８月６日　13：40～15：20）　司会者：畑中圭一、鄭鎮垠

16．イム・シネン（韓国）「子ども絵本の効用について」
17．イ・チュニ（韓国）「絵本と幼児の創意発達について」
18．林文茜（台湾）「国際化と台湾の創作絵本――作者の創作活動を主として」
19．田春暉（中国）「『好孩子画報』は子どもの健康と成長とともに」
20．張錦胎（中国）「新世紀における中国少数民族児童文学の発展

Ⅴ．　（８月６日　15：40～17：30）　司会者：李在徹、趙郁秀

21．潘明珠（中国香港）「混迷の時代における香港の児童文学」
22．耿　華（中国）「児童文学の植民地化傾向と民族化について考える」
23．趙天儀（台湾）「アジア児童文学の交流と展望――創作・評論・研究の相互交流の促進について」
24．程士慶（中国）「児童向け逐次刊行物（雑誌・新聞）におけるマーケティングスタイル」
25．蒋　風（中国）「情報化時代・子ども・児童文学――子どもの現状から児童文学の発展を考える」

これらの発表論文のうち、３．パク・サンジェ氏（韓国）、５．謝鴻文氏（台湾）、14．ダシドンドク氏（モンゴル）、21．潘明珠氏（中国香港）、24．程士慶氏（中国）の５名に対して、財団法人大阪国際児童文学館から奨励金（１人５万円）が贈呈されました。なお財団法人大阪国際児童文学館はこのほかに、８月８日大島町絵本館で行われたシンポジウム「絵本の民族性を考える」の発言集（４言語）を作成し、参加者に配布してくださいました。

8月7日（土）

☆ バスで大島町へ

名古屋市から富山県大島町へのバス移動。朝9時にバス4台で出発、昼食と世界文化遺産・白川村の見学を含めて約5時間の行程でした。大島町絵本館に到着、館内を見学後、富山市内の宿舎へ向かいました。

☆ レセプション

18時から富山駅前の名鉄トヤマホテルで、大島町主催のレセプションが開かれました。おいしいご馳走を食べながら、深まりつつあった交流・交歓がひときわ深まったようです。

8月8日（日）

☆ 分科会　10：00〜12：00

A．講演会「これからの絵本」　（1）対談　太田大八氏 VS 和歌山静子氏
　　（2）講演　唐 亜明氏
B．ワークショップ：絵本づくりなど　絵本館職員
C．絵本の朗読　絵本館職員

☆ シンポジウム　13：30〜16：00

韓国から絵本作家のイ・オクベ（李億培）氏、台湾から研究者の洪文瓊氏を迎え、これに日本児童出版美術家連盟理事長の絵本作家黒井健氏の参加を得て、「絵本の民族性を考える」についてのシンポジウムが開かれました。コーディネーターは絵本館の高井進館長が務められました。同時通訳が無理な状況であったため、あらかじめ提出していただいた講師の発言原稿を中国語・ハングル・日本語の3言語に翻訳、それをパワーポイントで画面に文字表示するという方法で進められました。

まずイ・オクベ氏は、民画・風俗画・仏画など韓国の伝統美術に謙虚に学びながら新しい絵本の創造をめざしてきた体験の中から、「この地球上で一番すばらしい絵の道具」である東洋の筆の機能を強調して、絵本の民族性に一つの方向性を示してくれました。さらに「自分の美しさが大事であるようにひとの美しさも大事であり、自分の命が大事であるように人の命も大事にする」共生の思考が絵本の創造にも欠かせないと提言を結ばれました。

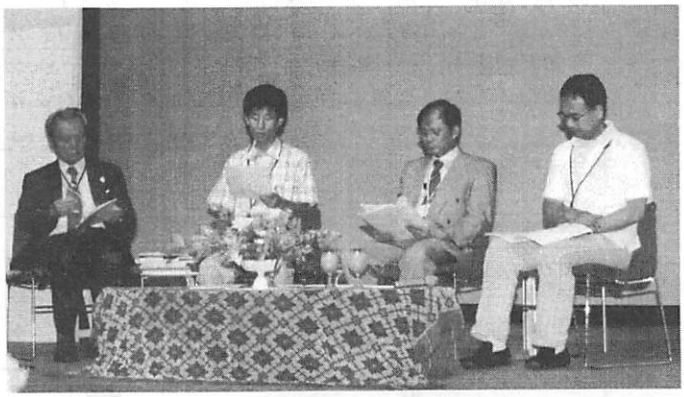
つづいて洪文瓊氏は台湾における絵本の現状を紹介しながら、台湾の政治態勢の変化を反映して郷土や原住民を題材とした絵本が重視される傾向があることを指摘するとともに、その一方で創作絵本の多くは欧米の絵本の影響を強く受けていると述べ、民族性を表現することの難しさを提起されました。

最期に黒井健氏は、かつて日本が東アジア諸国の民族文化を破壊し、「日本化」しようとする愚行を行ったことの反省から、「民族主義」という言葉で民族が語られるとき、それが両刃の剣になる恐れがあることを指摘し、絵本は民族性を持つべきか、民族性をベースにした国際性こそ志向されるべきではないかという問題提起をされました。時間的・言語的制約のために、じっくりと話し合い、意見交換をすることはできませんでしたが、3人の講師の提言を持ち帰り、それぞれの国・地域でこの問題を討議し、深めてもらいたいものです。

☆ 閉会式　16：00〜16：30

畑中圭一実行委員会委員長、大島町絵本館高井進館長の挨拶につづいて、大阪国際児童文学館理事長の中川正文氏から奨励金が贈呈されました。最後に次期開催国韓国の李在徹会長が挨拶、大会の全日程を終了しました。

一部の方々を除き、参加者はさらに1泊して富山県内や関東、関西地区の施設見学などを行いました。



大島町絵本館でのシンポジウム

第７回アジア児童文学大会決算報告

昨年１２月２４日の大会実行委員会で承認された第７回アジア児童文学大会決算の概要を報告します。ご援助いただいた法人各位、出版各社、並びにご寄付いただいた方々に改めて深く感謝申し上げます。

収　入

項	目	金　額（千円）	備　　考
参　加　費	参加 登録料	３４４６	
	滞 在 費 等	３６４９．５	海外参加者宿泊・食事代 国内参加者ﾚｾﾌﾟｼｮﾝ等参加費
	入場料 収入	３９９．５	ﾐｭｰｼﾞｶﾙ、講演会等
	ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ教材費	３６０	
助　成　金		２０５３	日本万国博覧会記念機構ほか３団体から
協 賛 金 等	出版社協賛広告料	７５０	１８社
	商社・団体広告料	２０	１社
	個　人　寄　付	５２７	３０名
自 己 資 金		２１５５	ｱｼﾞｱ児童文学日本ｾﾝﾀｰ、 大島町絵本文化振興財団
計		１３３６０	

支　出

項	目	金　額（千円）	備　　考
通　訳　費	通訳者報酬ほか	１０３９．５	延べ10名
機材借上費	同時通訳装置借上	１０４０	ﾚｼｰﾊﾞｰ、ﾌﾞｰｽ、ﾐｷｻｰを含む
	エンジニア報酬	１５０	
	設営・撤去費ほか	２６９．５	
会場借上費	看板制作等	１８０	舞台デザインを含む
	設営・撤去費ほか	１６６．５	
翻訳印刷費	論文等翻訳料	２９０	
	論文集等印刷料	１１４４．５	日韓版、中英版、大会資料
	資料コピー代	５４．７３	
報　償　費	講師謝礼	４７０	
	逐次通訳謝礼	６００	
	舞台仕込み費	１１６０	ミュージカル関係
	記念品代	６６．１５	
渡 航 費等	海外講師渡航費	２２１	
	講師・助言者滞在費	３４０．２２	
参加者宿泊・会食費	海外参加者宿泊費	２７６１．２	
	海外参加者食事費	６７０．４	
	パーティ費	１０９０．５１	前夜祭、レセプション
会場移動費	バス借上費	７００	延べ７台
	通行料・駐車料ほか	２６１．１８	
広　報　費	ちらし印刷費	１２６	
事 務 局費	通信費	１４２．４	
	ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ教材	３２０	
	名札作成費ほか	９６．２１	
計		１３３６０	

風のたより

ＪＢＢＹ３０周年記念シンポジウム

子どもの本は世界を結ぶ

～日本・韓国・朝鮮

ＪＢＢＹ（日本国際児童図書評議会）が創立３０周年記念事業を去る11月13日（東京）、14日（大阪）に開催し、その中でシンポジウム「子どもの本は世界を結ぶ～日本・韓国・朝鮮」が行われました。

ゲストはイラストレーターでＩＢＢＹ韓国支部会長のカン・ウヒョン氏、ソウル読書教育研究会会長のソン・ヨンスク氏、児童書出版のチョバン社代表シン・キョンスク氏、翻訳家の神谷丹路氏、在日作家のリ・キョンジャ氏の５名で、東京会場では児童文学者の松居直氏が、大阪会場では当センターの畑中圭一会長がコーディネーターを務めました。

東京（大崎・ゲートシティホール）では約200名、大阪（大阪府立中央図書館ライティ・ホール）では100名近い参加があり、韓国の子どもの本への関心が高まりつつあることをうかがわせました。大阪会場では、畑中会長がゲストの発言を総合して、次のようにまとめました。

①韓国絵本の隆盛を促した一因として、日本やアメリカなどからの刺激が挙げられる。交流と刺激の重要性を認識しよう。②子どもに関わる大人が偏見や差別意識を捨て、正しい歴史認識を持つことが必要だ。③子どもの本を通して両国が交流を深めるためには、歴史認識の合意・共有をめざすとともに、互いの違いを認め合いながら共生していこうとする姿勢の確立が必要だ。

台湾の作家　李潼氏が亡くなられました

『カバランの少年』（中由美子訳・てらいんく刊）の作者李潼（リートン）氏が昨年12月20日、羅東の自宅で亡くなられました。中由美子氏によると、１月２日追悼音楽会が開かれたそうです。

『カバランの少年』は民族問題を提起しながら展開する、すぐれたタイム・ファンタジーとしてわが国でも高く評価された作品でした。1953年生まれで前途洋々たる李潼さんが亡くなられたことは、大変残念な事です。ご冥福をお祈りします。

第４回韓国朝鮮児童文学セミナー

４月２日（土）１３時から
神戸学生青年センター（阪急「六甲」駅）
《問合せ先》仲村　修さん
Ｔ．０７９８－３３－９４３３

“鳥になった大クスの木”を韓国で出版

たに・けいこ

昨年８月名古屋市で開催された第７回アジア児童文学大会は、私にとって忘れられない大会となった。私はこの大会で、畑中会長の薦めもあり、いままでの地球環境保護活動を「絵本を通して地球の命を考える輪」というテーマで発表した。そして、その小さな輪を実現出来たように思う。

それは、この大会で再会した韓国児童文学学会の李在徹会長や、李圭喜さん達とのその後の交流により、『鳥になった大クスの木』という絵本を韓国で出版できたからである。海外での初めての出版に、自分でも不思議な気持でいる。

この物語は、鹿児島の蒲生に生きる1500年の巨木が、大空を飛んで都会に行く。しかし、自分のふる里、蒲生の大自然のすばらしさに気づき、土や根っこに支えられていたことに感謝するというものである。この本で、地球は様々な生き物達との共生によって築かれている事を子ども達が感じてくれればと思う。更にこの本が、未来の子ども達の地球環境を守ろうと日韓の心が一致し、李在徹会長ご夫妻をはじめとする皆さんの温かなご支援によって生まれたことにも意義があると言えよう。

私は、この出版のお蔭で初めて韓国を訪れた。驚いた事に、着いた日に韓国児童文学学会の皆さんに出版お祝いの乾杯をしていただき、感動した。翌日、日本にもゆかりのある小波・方定煥氏のお墓へ行き、山の上からソウルの雄大な景色を眺めながら、韓国の方々との出会いを大変幸せに感じていた。

『鳥になった大クスの木』は、交流に役立ててほしく、鹿児島県や韓国大使館、蒲生の小・中・高校等に寄贈した。書店にも新聞記事とともに置かれている。ハングルと日本語で書かれた珍しい絵本は、国境を越えた大自然の夢を人々に広げている。

[『鳥になった大クスの木』の日本での出版社は「森のおしゃべり」。問合せは、鹿児島市南新町17－２たに・けいこ氏まで。]

香港の詩人　韋姬さんのこと

畑　中　圭　一

昨年のアジア児童文学大会の冒頭に演じられた「親と子のミュージカル“アジアの風”」では四人の詩人の作品が朗読された。この四人を選んだのは故しかた・しん氏と私であるが、四人のうち香港の韋姬（ウエイ・ヤー）さんはふたりとも全く知らない詩人だった。しかし、中国の蒋風会長が『児童文学信息』という機関紙で彼女の詩は「童心の交響楽」だと激賞していることがわかり、その機関紙に掲載されていた十篇の詩を名古屋大学大学院生の顧那さんに翻訳してもらった。作品に目を通すと、対象を新鮮な視点でとらえ、ナイーヴで親しみやすい表現で描いたものが多く、その中から「風は男の子それとも女の子」という作品を選んだのである。

早速、朗読することについて許諾を求めたところ、ＯＫで、しかも大会参加者として韋姬さん自身来日したいという。願ってもない事で、ぜひ参加してほしいと連絡した。

さていよいよ８月４日、韋姬さんは無事到着。しかし、言葉の壁は厚い。私は中国語を話せず、彼女は香港の方だから英語は大丈夫だろうと思っていたら、ほとんど英語をしゃべれない。しかたなく日本語のできる潘明珠さんのお世話になってやっと挨拶をかわし、今回の協力に感謝する。彼女からは最近出版した中英文詩集『湿月亮』をいただき、私は詩集『木と風と空のうた』をさしあげた。

翌日、ミュージカルも無事終了、夜のレセプションの席で私は、ミュージカルの中の詩を書いた人として韋姬さんを皆さんに紹介した。それが彼女にはとても嬉しかったらしく、帰国してから丁寧な感謝のお手紙をいただいた。作家としてはすでに実力を認められている韋姬さんが、これを機会に詩人としての新たな一歩を踏み出してほしいものである。そうした願いをこめて、詩集『湿月亮』の中から作品を紹介（英訳からの重訳）しておく。

在很近的近處

まどの　そとでは
日光が　木のかげに　はなしかけている

はるか　とおくでは
海が　雲に　はなしかけている

ずっとまえには
ママが　パパに　はなしかけていた

いま　わたしは　ひとりぼっち
だれも　はなしかけてくれない

傷心的小樹

雨が　やみ
風も　しずまり
野は　すっかりしずか

ひとかけらの月の光で
指をきられた　小さな木だけは
かなしく　さけび
くるしみを　うったえる

草葉上的露珠

草のうえで
つゆが　ぴかぴか　ひかっている
空の星が　地面にちりばめられたのかな

葉のうえで
つゆが　きらきら　きらめいている
川の真珠が　木にかかっているのかな

草のうえで
つゆが　ちかちか　またたいている
わたしに　ひみつを言おうとしてるのかな

発売中

『第７回アジア児童文学大会論文集』

大会当日、参加者にお渡しした論文集を発売しています。次の２種類です。

☆ 日韓版（日本語とハングル）201 頁
☆ 中英版（中国語と英語）188 頁

頒価は、それぞれ２０００円（送料は当方負担）。ご希望の方は花井都茂子（Ｔ．0568－95－0091）、または畑中圭一（Ｔ．0774－72－9199）までお申し込みください。

あとがき

この号は、第７回アジア児童文学大会の報告特集としました。ようやく大会の後かたづけも終わり、センターはもとの落ち着きを取り戻しました。問題は、今後このセンターをどう運営していくのかということですが、とりあえずは、来年韓国で開催予定の第８回大会関係の事務（連絡や参加申込など）まではやらせていただこうと考えています。

これからのセンターのあり方について、皆さんがたの率直なご意見をお待ちしております。（畑中）